平成２８年度（２０１６年度）紀要１１１号

Ⅵ

不登校対応研究グループ

「不登校を生まない学校・学級づくり

不登校になったらどうするか」

＜研究員＞

吹田東小学校	養護指導教諭	小木　小百合
山田第三小学校	教　諭	小泉　絢子
千里丘北小学校	教　諭	古川　悠紀
第六中学校	教　諭	岡本　功
千里丘中学校	教　諭	長田　純子
古江台中学校	教　諭	田中　千織
教育センター	研究員	小林　優

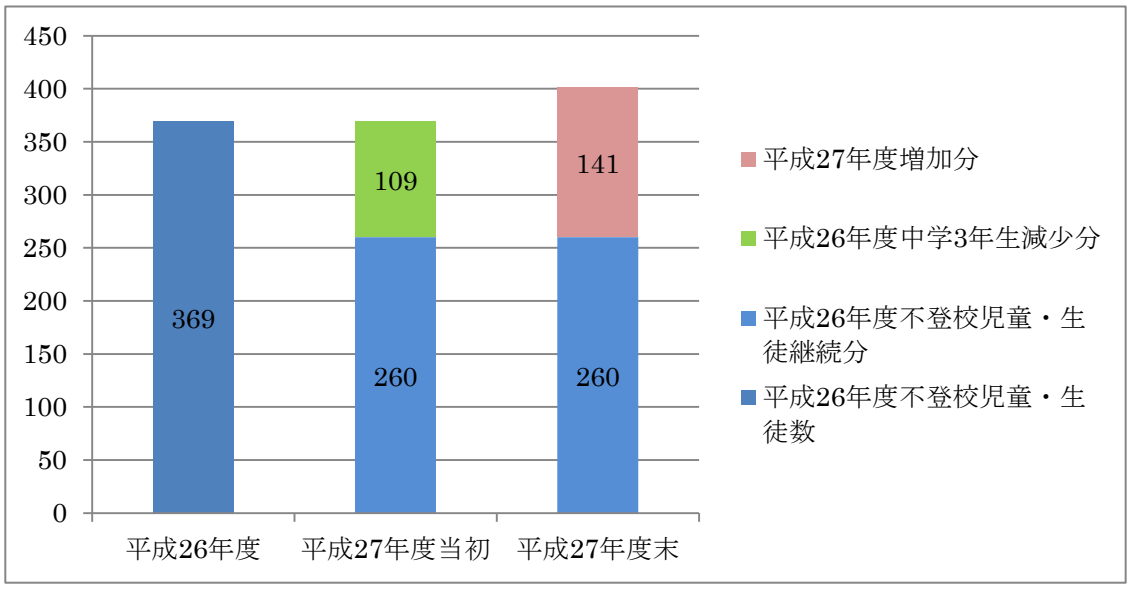
＜スーパーバイザー＞

千里金蘭大学	准教授	黒瀬　哲也

１．はじめに

大阪府では、府下全小・中学校で、「長期欠席・不登校児童生徒数及び安全確認調査」を毎年行っています。平成２６年度の調査では、吹田市の不登校（病気や経済的理由などを除いた、年間３０日以上の長期欠席者）児童・生徒数は３６９人であり、そのうち中学３年生は１０９人、平成２７年度の調査では、不登校児童・生徒数は４０１人であり、１年間で１４１人が新たに不登校児童・生徒が増加しましたが、もともと不登校であった児童・生徒数は２６０人であり、１年間で全く減少していない状況でした。（図１）吹田市の小・中学校では、不登校の未然防止に取り組む必要性は認めつつも、取組は、広がっていないのが現状です。

（図１）



（平成２６年度長期欠席・不登校児童生徒数及び安全確認調査より）

そのような吹田市の状況を踏まえ不登校対応研究グループが発足しました。

吹田市立教育センターでは不登校児童・生徒支援事業として、「光の森」「学びの森」という適応指導教室を開室し、不登校児童・生徒の学校復帰支援を行っています。不登校の未然防止についても吹田市小・中学校を支援するため、教育センターの研究員も研究メンバーの一員として加わり、研究成果を全教職員に活かしてもらいたいと考えています。

２．研究目的と概要

不登校児童・生徒への対応で教職員（担任）がとまどうポイントのうち、以下３点に絞り、教職員が不登校児童・生徒に対して、どう対応していけばよいかの指針となればと、「不登校を生まない学校・学級づくり　不登校になったらどうするか」をテーマに研究を進めています。

（１）　初期対応

教職員（担任）として、不登校児童・生徒にどう動けば良いのか、原因としてはどの様

なことが考えられるのか。

（２）段階に応じた指導の見極め

学校復帰につながる背景には、学年、学級が変わるときなどの段階に応じた児童・生徒の理解や指導の見極め、信頼関係の築き方等に様々なヒントが隠れている。

（３）　不登校児童・生徒本人、保護者との関わり

保護者も教職員も不登校児童・生徒に関わり続けることが基本。

３．活動経過等について

平成２８年　６月　７日（火）総会及びメンバー紹介
平成２８年　７月　５日（火）テーマ決め
（ＳＶ参加・助言）
平成２８年　８月　５日（金）各メンバーから不登校対応事例収集
（ＳＶ参加・助言）
平成２８年　８月３０日（火）ＳＶよりエコロジカルマップの説明と
エコロジカルマップを使用しての事例検討１
（ＳＶ参加・助言）
平成２８年１０月１４日（金）エコロジカルマップを使用しての事例検討２
平成２８年１１月１７日（木）教育研究報告会の内容精査１
平成２８年１２月２７日（火）ストレス耐性について（ＳＶによる講義）
（ＳＶ参加・助言）
平成２９年　１月２４日（火）教育研究報告会の内容精査２
平成２９年　１月２５日（水）教育研究報告会　発表
平成２９年　３月２４日（金）次年度に向けての内容精査
（ＳＶ参加・助言）

※ＳＶ…千里金蘭大学・黒瀬先生

４．エコロジカルマップの実践

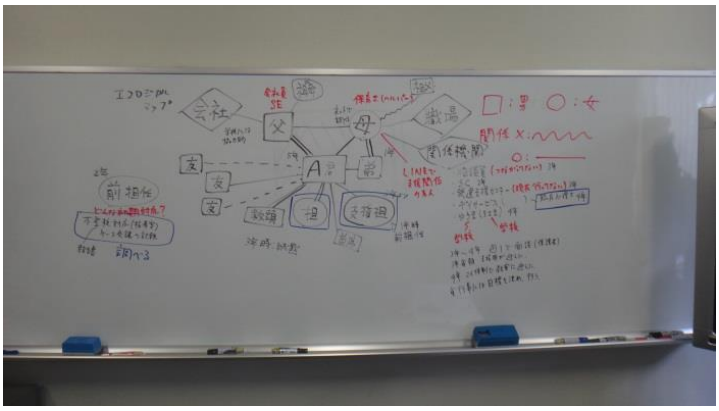
（１）エコロジカルマップとは

1975 年にアメリカのアン・ハートマンによって考案されたエコマップの弱点を補い、家族関係を少し広くとらえて、周囲の人たちとの関係や属性などの特徴も図示するものです。

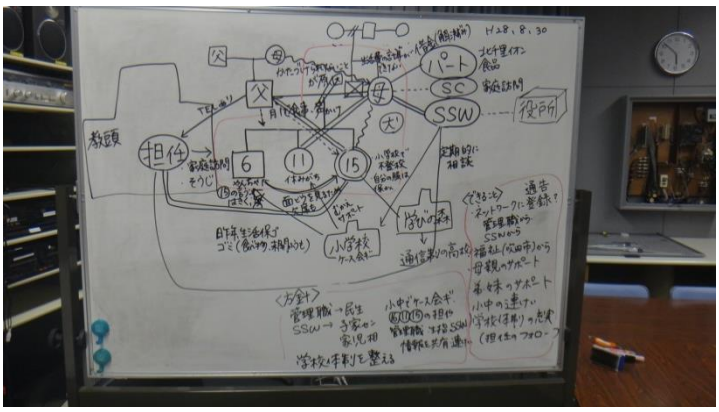
学校現場においては、不登校児童・生徒を取り巻く複雑な環境を図で表すことによって、課題や解消した不和など様々な事象を見出すことができます。

（２）エコロジカルマップ実践例

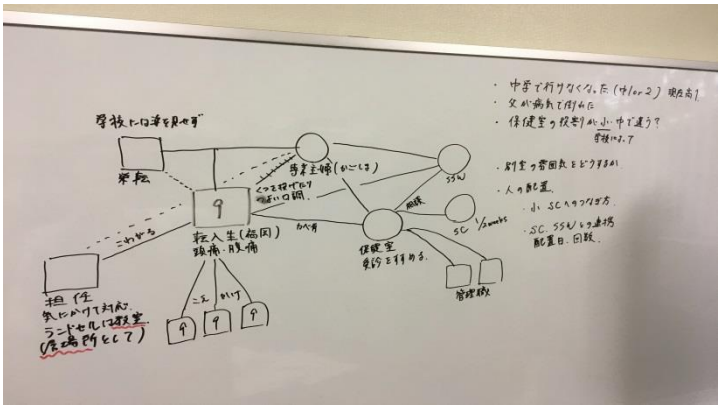
例１（第４回会議にて）



例２（第５回会議にて）



例３（第６回会議にて）



（３）実践を通して見えたもの

ア　会議に参加している人全員が同じものをみているので、中身を確認しながら会議をすすめることができる。

会議後、撮影することで記録として残すことが容易。

図式化されることで、足りない支援や対象者の状態などが浮かび上がってくる。

小木　研究員

イ　言葉ではなく記号・図で描くので、複数の人の間であっても共通理解を持ちやすい。言葉だけでのやりとりだと認識のずれが起こってしまうが、それを防ぐことができる。加筆や訂正がしやすい。記号を使えるようになるまでは、資料を見て描いていくので、手間がかかるが、活用できればとても有効。

小泉　研究員

ウ　「エコロジカルマップ」については、非常に有効なものであると感じています。
理由は、まずマップに表せば、一目でこれからの支援・対応について考えることができること。
２つ目は、あとから見た時でも共有しやすいところが有効であると感じています。
ただ、慣れるまでが少し時間がかかってしまうことが少しあるかなと思います。

古川　研究員

エ　「エコロジカルマップ」では、分かりやすく整理されているので現在の状況が統一して把握でき、客観的に判断ができる。
また、具体的な対応を入れながら１つの図にまとめてあるので、各々に対する対応の仕方がとても分かりやすく今後の対応が考えやすくなる。

岡本　研究員

オ　「エコロジカルマップ」は、学校現場における教育相談の会議で活用できるのではと思いました。実際の会議においての不登校生の報告で、文章表記だと書くのも読むのも時間と手間がかかり、言葉では長々と説明が必要だし、他学年の生徒だとどんな家庭環境だったかすぐには思い出せないし･･･とやたらと時間がかかっています。そこで、エコロジカルマップを年度当初に作成し、会議のはじめに変更・追加事項を確認してから報告すれば、学年担当が口頭で説明するにしてもわかりやすいし、現在置かれている環境の説明が短くなる分、今後の対応などの相談に時間が割けて、今までより効率よく会議が進められるのではと感じました。来年度、機会があれば実際に試してみたいと思います。

長田　研究員

カ　マップの利点は多くの情報を、多くの人の中で確実に共通認識ができる点だと思う。実際、自分の抱えている事例をマップによる検証によって、すばやく情報を共有し、どの部分をサポートしないといけないかを議論することができた。マップから浮かび上がる問題点(誰が一番しんどい思いをしているのか､どのような手立てがあるのか)は一目瞭然であり、とても議論する上で理解しやすい。視覚的な情報は、文章でまとめられたものより、イメージしやすく、また情報を引き継ぐのに適している。以上の事柄から、入れ替わりの激しい現場では、積極的にマップを活用していくべきだと思う。生徒の引継ぎをスムーズに確実に行うために。

田中　研究員

キ　・エコロジカルマップ作成を参加者全員ですることにより、当事者意識が高まった。
・対象児童・生徒を取り巻く環境が把握しやすくなった。
・キーパーソンが浮かび上がり、支援の方向性が明確になる。

以上の３点に加えて、もっとも強く感じたのは参加者同士の対話があったということ。参加者それぞれが持つ情報をひとつのマップに落とし込むことで気づきの幅が広がっていった。情報提供者からの説明で終始するケース会議に比べ、非常に有意義なものになると思う。

小林　研究員

（４）エコロジカルマップの利点

文章で書かれた情報と図をくらべると、図のほうが認識のずれが起こりにくく、第三者でも情報共有がしやすく、共通認識をもちやすくなります。また引き継ぎ資料としても有効であり、追加・上書きも容易です。また線の太さは関係の強さを、矢印は支援の手があるということなので、できるだけ支援が必要なところは矢印が増えるように、線を太くするにはどうすればいいかを考える等、目標設定するのにもよいツールとなります。

５．さいごに

不登校児童・生徒に出会わない教員は、おそらくほぼいないと思われます。では、不登校児童・生徒にどう対応するか、これはどの教員も悩み、解決方法を探っている状況です。不登校児童・生徒の対応は、「どれが正解でどれが間違っている」というのは、実際経験してみないことには、分からないことが多いでしょう。

本研究では、そういった本市の教職員のために少しでも役に立った、知っていてよかったと感じられる内容をお伝えできればと一年間やってきました。

来年度はさらに多くの不登校児童・生徒の対応事例を検証し、「こんなときにどうするか。どのように対応してきたか。」をまとめ、本市教職員が不登校児童・生徒に対応するときの一助となればと考えています。今年度実施してきた「エコロジカルマップ」は不登校児童・生徒の支援方法を考えるツールです。来年度は本市小・中学校の校内適応指導教室や外部関係機関との連携方法などを探り、研究を進めていきたいと考えています。

〈参考〉　「エコロジカル・マップ」の作成によって保護者対応トラブルの解決策を探るワークショップ実践
大阪大学　小野田正利　　日本教育経営学会紀要第５７号・２０１５年